

令和8年度 国語（書写）部会研究計画（案）

1 研究主題

言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成

2 研究主題について

令和7年9月、中央教育審議会教育課程企画特別部会から学習指導要領の改訂に向けた「論点整理」が出された。その中で、これからの予測困難な時代には、しなやかに「自らの人生を舵取りできる力」や主体的に社会参画する「民主的な社会の創り手」の育成が喫緊の課題であると述べられている。さらに、生成AIなどデジタル技術の発展が相まって、独自の発想や視点に価値が置かれるようになってきているという社会的背景から、一人一人の「好き」（興味・関心）を育み、「得意」を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取組と、当事者意識をもって、自分の意見を形成し、多様な他者と対話や合意を図る取組を同時に進め、これらが有機的に関わり合い高まっていく教育課程に変革していく必要があるとも記されている。これらのことから、多様な子供たち一人一人に、「主体的・対話的で深い学び」による資質・能力の育成を図るための「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実が必要であると考えられる。

本県においては、多様で複雑な現代の社会を生き抜くには、様々な形式で伝えられる情報を読み取る力や、自分の考えを形成するために必要な情報を取捨選択し、選び取った情報を解釈したり活用したりする力が必要だと考えており、このようなこれからの社会を生きるために必要な力を「徳島版読解力¹⁾」として整理し、多様な学習活動を通して育成を図る施策を推進している。

このような状況を踏まえ、本部会は、昨年度に引き続き研究主題を「言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成」とし、これまで国語部会と書写部会がそれぞれに積み重ねてきた研究や、単元学習の理念²⁾とその成果をふまえ、子供一人一人が言葉を大切にしながら、自律的に学ぶ過程において、身に付けるべき資質・能力を育むことのできる、国語（書写）教育の在り方についての研究を推進する。

（1） 「言葉を大切にする」子供とは

本部会では、「言葉を大切にする子供」を「言葉による見方・考え方³⁾を働かせている子供」と捉える。自らの課題を解決していく過程において、「なぜ、この言葉が使われているか」、「自分の思いを表現するための的確な言葉はどれか」、「どのように表現していたらよいか」などと言葉の意味・使い方・構造に着目しながら思考・判断し、理解したり表現したりすることを通して、言葉への自覚を高めている子供を、「言葉を大切にする子供」だと考える。

言葉を形成する文字を書くことを主体とする書写の学習では、「文字を大切にする子供」の姿にも重きを置きたい。書写の学習を通して、文字感覚を高め、確かな書写力を身に付け、相手意識や目的意識をもって自己表現する子供を「文字を大切にする子供」と捉え、そうして身に付けた能力は、各教科等の学習活動や日常生活の基盤となり、豊かな文字文化を継承・発展させる態度を育成することに繋がると考える。

（2） 「自律的に学ぶ」子供とは

本部会がめざす「自律的に学ぶ子供」とは、主体的・協働的に課題を解決していく過程において、自らの学習の状況を把握・調整しながら、学習指導要領に示された資質・能力を調和的に備えていく子供である。このような子供を育成するためには、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立、指導と評価の一体化を図ることが特に重要であると考えられる。

また、その際には、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する『個別最適な学び』と子供たちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』の観点から学習活動の充実を図ることに留意したい。

3 研究の内容と方法

学習過程（単元構成、一単位時間構成）に着目して研究に取り組んできたこれまでの成果を生かし、学習過程における工夫や教師の指導・支援等を常に意識しながら研究を進めていく必要がある。

(1) 考えを形成、共有する過程における指導の工夫

研究の軸としてきた「言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開」の充実を図るために、考えを形成する過程においては、子供一人一人が、自ら課題をもち、その課題に対して既存の言語に関する知識や経験を想起し、五つの言語意識⁴を自覚しながら言葉や学び方を選んだり、結び付けたりしながら考えることができるように指導を工夫する必要がある。

また、考えを共有する過程においては、子供一人一人が必然性のある活動として、自らが形成した考えを他者と共有する目的を自覚していることが前提となる。そして、考えを共有する過程を通して、自分の学びの成果と課題を明らかにしたり、新たな考えを形成したりして自己調整することができるように指導を工夫する必要がある。

① 問いをつくるための指導の工夫

教師は、子供の興味・関心や必要感を育て、生活に根差した問いが生まれるようにする必要がある。子供一人一人が、自らの言語生活と深く結び付き、意欲的かつ継続的に探究していくことのできる問いをもったり、自身の中に生じた問いに気付いて解決に向かおうとしたりするための支援を心掛けたい。

また、言葉による見方・考え方を働かせながら粘り強く探究し続けて、自分の考えを広げたり深めたりすることのできる問いの質の向上にも留意したい。

② 一人一人の学びの姿に即した学習の指導・支援の工夫

教師は、子供が自らの学習の状況に応じて学び方を選びながら学習に取り組むことができるように、個々の学びの姿に即して指導・支援をする必要がある。そこで、子供が自分の思いや考えを形成したり、整理したりすることができるように、具体的な言葉による観点や例の提示、柔軟な学習形態、言語環境の整理など、多種多様な学習の手引き⁵の工夫が考えられる。書写の学習においては、これまで研究してきた「つかむ・高める・確かめる・生かす」過程を大切に、子供が主体的に学びながら自己を高められる指導・支援の工夫を研究していく必要がある。

③ 探究の過程に言語活動を位置付けること

教師は、子供が探究していく過程に、自分の考えの深まりを実感することのできる言語活動を位置付ける必要がある。特に、「書きながら考える」「考えながら書く」などの思考を伴う書く活動により、そのときどきの自分の考えが広がったり深まったりしたことを自覚できるようにしたい。

④ 考えを共有する必然性のある場面の設定

教師は、学習活動において、考えを共有する必要性、或いは必然性のある場面を設定する必要がある。子供たちが目的意識と見通しをもって課題に取り組み、自ずと共有するポイントを絞りながら、自他の考えを比較・検討したり、結び付けたりすることができるように手引きしたい。

⑤ 言語意識の明確化

考えを共有する場面において、教師は、子供が言語意識を明確にもつことができるように留意する必要がある。「誰に」「何のために」「どのような場面や状況、条件で」「どのような方法によって」「(その結果、) どうであったか」などを意識しながら、考えを共有することができるように、その手立てを講じたい。

(2) 単元の構想と展開における評価の工夫

教師は、目の前の子供の実態や課題をつぶさに見取り、その姿をもとに自らの指導を見直し、改善を加えながら、実際の授業に臨んでいく。「指導と評価の一体化」を進めるためにも、子供一人一人が自己評価や相互評価をしながら学びの軌跡を振り返り、自己の学びを自覚することができるように留意したい。その際には、「学習の記録⁶⁶」等の学習の履歴を効果的に活用することによって、考えの可視化を図りたい。

(3) ICT利活用の工夫

国語科においてもICT活用は、子供の学びを広げ、共有し、深めるための手段であると考えられる。情報の収集や整理、知識技能の習得、学習した内容の蓄積等、子供の学びの活性化はもちろんのこと、子供の興味・関心や必要感、学習の目的に応じたICT利活用に工夫を凝らしたい。その際、手書きによって育まれる言語感覚や思考の深まり、手書き文字⁷⁷のよさや大切さについても子供の自覚が高まっていくように配慮したい。

(4) カリキュラム・マネジメントに関する研究

国語科において育成をめざす資質・能力を体系的に把握するとともに、子供や学校の実態と重ね合わせながら、年間あるいは6年間を見通した年間指導・評価計画に位置付ける必要がある。先の単元で習得した資質・能力が後の単元で活用されたり、同じ言語活動を発展させながら螺旋的に繰り返したりしていくなど、活用しつつ習得することによって、資質・能力が育成される。活用と習得の組み合わせを考える際には、それぞれの言語活動の特性を見据え、関連付けた計画が必要となる。また、国語科における「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及びそれを支える「知識・技能」と書写の関わりにおいても、学習内容・題材・学習時期を加味した上で、学習活動に必然性が生まれる場合は、一体的に扱うことなども検討していきたい。

年間指導・評価計画を作成する際は、教科等横断的な視点に立ち、他教科等との関連を一層考慮し、国語科を軸としたカリキュラム・マネジメントを通して資質・能力の育成を図りたい。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の実現に向けては、学習指導過程の改善とカリキュラム・マネジメントの両輪が不可欠である。単元や授業においては、そのときどきの学習の状況を子供の姿等からの確に評価し、学びの過程の再構成、指導・支援の工夫・改善などを行うことにより、子供一人一人の学びを深めていきたい。

(5) 日常的な取組

① 語彙指導の充実⁶⁸

語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する過程を充実させるためにも、思考を広げたり深めたりしていくことができるように語彙を豊かにする指導の充実が求められる。

② 読書活動の充実⁶⁹

読書は、多くの語彙や表現を通して様々な世界に触れ、自分事として体験したり知識を獲得したりしながら、新たなものの見方や考え方に会うことを可能にする。子供の読書生活を豊かにするためには、日常的に読書に親しむ態度を養う指導に留まらず、その一人一人の発達の状況に応じて、情報を収集したり考えを形成したりする際に役立つ読書へと系統立てた読書活動を推進していく必要がある。

③ 手書き文字のよさを感じられる活動の充実や場の設定

手書きすることは、単なる情報の蓄積や伝達だけでなく、相手を意識したコミュニケーションや、自己表現の場となる。気持ちを込め、丁寧に書いた文字にはぬくもりがあり、文字を書き進める過程で書き手の個性や思いが表れる。表現や鑑賞活動、練習の場を充実させることで、手書き文字のよさを実感できるよう工夫したい。

-
- *1 「徳島版読解力」は、次の「5つの力」で構成される。
- ①正確に読む力 ②必要な情報を取り出す力 ③比較・関連付けて理解する力 ④見直す力 ⑤発信する力
- *2 本研究は、自らの学習課題を設定し、その解決に向けて思考・判断・表現を重ねるとともに、学習の記録をもとに、学習の節目で自己の取組を振り返りつつ、修正や変更を加えていくことができる子供の育成をめざした「単元学習の理念を生かした指導」に関する研究と軌を一にする。次は、単元学習の理念の要素をまとめたものである。
- ①単元を通した指導目標と子供の活動目標が明確に設定されていること
 - ②身に付けるべき言語能力を適正に育成すること
 - ③子供の主体性を重視していること
 - ④学習の自覚化を図っていること
 - ⑤展開の過程に、他と関わり合う交流の場が位置付けられていること
 - ⑥子供の発達に応じ、教育課程全体を見通し言語活動が位置付けられていること
- *3 言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。この「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりする」とは、言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味することを示したものとと言える。また、書写における「見方・考え方」とは、「文字を書くことを、文字の原理・原則に着目して捉え、理解したり伝えたりしながら表現し、文字への自覚を高めることである」と考える。
- *4 学習指導要領において、相手や目的、場面などの「言語意識」が、学年段階と領域内容に応じながら、螺旋的に高められるように配意されている。「言語意識」は、子供たちが言語活動を振り返る際の観点となる。
- 小森茂氏による、「五つの言語意識」は、次の通りである。
- ①自分にとっての相手意識
 - ②(①を受けて)自分にとっての目的意識
 - ③(①②を受けて)自分にとっての場面や状況、条件意識
 - ④(①②③を受けて)自分が意図的、計画的に活用するための表現や理解の方法意識
 - ⑤(①②③④を受けて)自分の表現行為や理解行為を自己評価する評価意識
- *5 ワークシート等に限らず、指導者が学習者の実態を考慮して学習を導くありとあらゆること・ものの全てを「手引き」と考える。手引きには、大きく分けて四つの種類がある。
- ①もつべきものに関心をもたせる手引き(学習者が「やってみよう」という言語活動を設定するなど)
 - ②学習内容についての手引き(書き方・話し方の視点を示すなど)
 - ③学習の進め方についての手引き(活動の手順を示すなど)
 - ④学びから得たことを確認するための手引き(学習記録など)
- *6 「学習の記録」は、学習の手引きや成果物、振り返り、音声データや映像などのICT機器によって蓄積されたものなどがある。「学習の記録」は、子供一人一人が学びを自己調整することや、自身の考えの変容や成長、課題などに気付くこと、次の学びに対する意欲を高めることに有効である。また、自己の学びを振り返り、自覚することができるようになる。教師は、それらの記録から、一人一人の学びの姿や考えの変容、意識の流れ、学びの意味や可能性を捉えるなどして、価値付けていくことにより、「指導と評価の一体化」を進めていくことも考えられる。
- *7 手書き文字とは、手以外の体の部分を使って書く場合も含む。
- *8 語彙指導をする際には、教師は、学習指導要領に示されている各学年の語彙指導の重点を踏まえつつ、学習や日常生活の機会を捉えて意識的に言葉を投げかけたり取り上げたりしながら、適切な使い方ができるよう指導していくことが大切である。また、辞書や事典を利用して必要な語句等を調べる習慣を身に付けさせたい。
- *9 授業においては、子供が目的に応じて図書を選んだり、目的に応じた読み方(精読・速読等)を選択したりするなどの指導を工夫したい。